

まえがき

活版印刷術の登場するはるか以前から、書物は記述されてきた。それは、洋の東西をとわず、主に僧侶や学者による、ほとんど期限のない営々とした手仕事であった。近代において、出版業が発展し、公私にわたる図書室、図書館が拡大するとともに、目録や書誌の作成は書店主や図書館員が中心となった。彼らは図書の販売または閲覧を目的とする、期限付きの簡略な作業を要求された。印刷術の発達はその作業を容易にした。しかしその一方で、古典籍を対象とした学問的書誌研究は、人文学の基礎として世代を越えて受け継がれた。

ヨーロッパの近代は商人、宣教師、軍人などが世界の海に乗り出した大航海時代に始まる。彼らは異文明との接触を通して、それまでとは比較にならないほど多量の旅行記、報告書を著した。とりわけ、インドであれシナであれ、また日本であれ、伝道と迫害のなかから宣教師がもたらした異文明情報は、ヨーロッパ人が彼我を比較し、自文明を哲学的または歴史的に考察する契機となった。日本に來たフロイスのように宣教師自身がそうした考察を行った例もある。17世紀には、同時代の異文明情報をもとに人文学的に思考する風潮が高まり、専門家の手になる総合的な異文明文献目録が求められるようになった。スペインの歴史編纂官ビネロが著した『東西両インド文献略誌』（マドリッド、1629）はその先駆といえよう。この『略誌』こそ、日本関係欧文図書を記載した最初の刊行書誌であった。

18世紀のヨーロッパで、ある程度まとまった日本関係書目として注目すべきものはイエズス会士シャルルヴォアが自著『日本史』新版（パリ、1736）の第9巻に収めた「日本関係著作の書目と批評」であろう。プロテスタントのケンペルが旺盛な好奇心と博物学的方法で観察した記録『日本誌』（仏訳、ハーグ、1729）は、イエズス会の日本における足跡を無視し、その付録論文で「鎖国」を容認するものであっただけに、シャルルヴォアがそのヨーロッパ各国における流布を看過できなかったのは当然であった。前著の『日本キリスト教盛衰史』（ルーアン、1715）の誤りを正し、ケンペルに対抗する目的で書かれた『日本史』新版では、日本教会史のみならず、地理書、博物誌、旅行記をも含め、16世紀以来ヨーロッパで刊行されてきた日本関係書106点に対して、イエズス会の立場から書評が加えられたわけである。

「鎖国」期に來日した博物学者は、ケンペルにせよツェンペリーにせよ、標本の収集と分類、記述が主要関心事であり、日本の文献に対する書誌的な興味はそれほど強くなかった。商館長ドゥーフやコック・ブロンホフは異国趣味による好事家のコレクターであり、書誌的な関心はなかったといつてよい。日本人の宗教意識、習俗に深い関心を寄せた商館長ティチングは、文化人類学的な質問で身近な日本人を悩ませるとともに、『日本王代一覽』『大日本史』『孝経』など日本文化を理解する上で貴重な文献を収集し、その書誌的な情報をオランダ通詞に執拗に求めた。彼は人文的、開明的な教養をもった国際人であったが、ナポレオン戦争のさなか自著出版の機会もなく、孤独な学究としてパリで客死した。その遺された日本コレクションは、戦後に花咲いたパリ東洋学の旗手、レミュザヤクラブロートの書誌的研究に貴重な資料を提供した。これに対して、博物学コレクター・シーボルトは、帰国後はヨーロッパ中でツェンペリーに倍する日本学者としての権威と名声を獲得しようと、勇躍日本にやってきた。彼は計画的どおりに一大日本コレクションを形成し持ち帰ることに成功したが、収集図書の目録作成、書誌的研究は助手のホフマンや郭成章にまかせた。

一方、彼らと同時代の日本の蘭学者は実学的要請に追われ、一般に舶載蘭書の書誌的研究に無関心であった。博物学者平賀源内が所蔵蘭書のみずから目録化した「物産書目」は、洋書に対する書誌的

な関心の萌芽をうかがわせるものであるが、その後継者はいなかった。江戸時代の人文的な洋書書誌としては、学者大名松浦静山が通詞からの情報をもとに所蔵蘭書を記述した「平戸藩楽歳堂蔵書目録」「新增書目」の蛮書篇、さらに幕府御書物方近藤重蔵の編纂した「好書故事」蘭書篇をあげることができる。しかし、これらも日本における西洋書誌学を生み出す契機にはならなかった。

ヨーロッパにおける最初の独立した日本関係洋書書誌は、日本の開国後に出版されたパジェス『日本図書目録』（パリ、1859）である。しかし、オランダ商館長レヴィスゾーンが開国直前に出版した自著『日本雑纂』（ハーグ、1852）の巻末には、解題をほどこした詳細な日本関係欧文献書誌が付けられていた。これは今日でも有益な書誌であるが、幕末の蘭学者にとって初めて目にする日本関係洋書書誌であり、付録に訳出された開国をめぐる欧米新聞の記事とともに、彼らに重要な情報を提供していた。さて、熱心なカトリック信者であったパジェスは、『日本切支丹宗門史』（パリ、1869-1870）執筆の過程で作成した参考文献リストをもとに、ドンケル・クルチウス、ホフマン共著『日本語文法』の仏訳（パリ、1857）、『日葡辞書』（長崎、1603）の翻訳（『日仏辞書』、パリ、1862-1868）と並行して、『日本図書目録』の編纂をすすめ、『日本切支丹宗門史』に先がけて「宣教師、学者、旅行家」のために、この目録を出版したのだった。マルコ・ポーロ『世界の驚異』（イタリア語初版、ヴェネチア、1496）から自著「日本、および西洋列強との最近の条約」（パリ、1859）まで、658点が刊行年順に記載されている。フランス第二帝政を支えたカトリック界の海外伝道熱に呼応した出版であり、実際、幕末に来日したパリ・ミッションの宣教師たちはパジェスの他の著書とともに、この目録に大いに助けられたはずである。

パジェスの期待に沿っていたかどうか不明であるが、彼の書誌を手がかりに記念碑的な日本関係書誌、『日本耶蘇会刊行書志』（私家版、1888）を完成させたのは元英国公使館書記官アーネスト・サトウであった。明治40年（1907）、初めての欧州留学をはたした言語学者新村出は、サトウの『日本耶蘇会刊行書志』に導かれてオックスフォード大学ボードリアン図書館、大英博物館所蔵のキリシタン版を研究し、その書香を日本に広めようと、明治42年帰国の途についたのだった。

明治時代になると欧米の雑誌を含む日本関係文献は多分野にわたって急速に増大した。これを時期的にはパジェスを継ぐ形で1859年以降1906年刊行分までについて、簡潔な書誌情報を盛り込み、分類目録としたものが日露戦争をはさんで刊行された。ウェンクスターン『大日本書史』（ライデン、1895）および同『大日本書史第二巻』（東京他、丸善、1907）である。前者にはパジェス『日本図書目録』の影印版が収録され、後者にはウェンクスターン『パジェス日本図書目録補遺』およびバームグレン『日本関係スウェーデン語文献分類目録』が付録として加えられた。

1875年以来20年を費やしてシナ関係欧文献分類目録『ビブリオテカ・シニカ』（初版、パリ、1878-1885）を完成させた東洋学者コルディエは、その編纂途中から同類の『ビブリオテカ・インドシニカ』『ビブリオテカ・ヤポニカ』両書誌をも準備していた。そこへ、ウェンクスターン『大日本書史』が出版された。コルディエはパジェスの影印版でまにあわすというウェンクスターンの「重大な過ち」を前に、自分の高齢をも考慮し、『ビブリオテカ・ヤポニカ』を『ビブリオテカ・シニカ』式の詳しい分類目録とすることを断念して、パジェス『日本図書目録』を増補訂正するにとどめたのだった。

コルディエ『日本書誌』は文献所在先としてビブリオテカ・ナショナルと大英図書館をあげるのみで、収録文献には部分的な日本関係記事を含むものが欠落していた。ウェンクスターン『パジェス日本図書目録補遺』もその種の図書をかなり収録しているが、文献所在先の記載はなかった。1940年、ベルリンの日本研究所と京都の独逸文化研究所の編纂として、京都で出版された『日本古文献目録』は、日本開国以前の古文献について、それらの欠点を補うことをめざした日独の共同作品であっ

た。日独の共同作品であっただけに収録文献1624点の所在先はドイツ、オーストリアおよび日本の主要大学図書館などに限られていた。1926年以来その編纂主任をつとめたのはシーボルト『日本』の書誌の研究をすすめ、その校訂版を完成させた日本学者トラウツであった。京都においては京都帝国大学勤務の鈴鹿三七、山鹿誠之助、天野敬太郎、重久篤太郎など書誌研究に優れた図書館員がこの事業に協力を惜しなかった。

戦後、日本において、日本関係洋書目録と銘打って最初に刊行されたものは、『東洋文庫蔵日本部門分類図書目録』（東京、1957）であろう。東洋文庫開設（1917）以来収蔵の日本関係図書が収録されている。最近では、京都外国語大学所蔵日本関係洋書目録『ニッポナリア』全3巻（1972-1984）、横山俊夫編『京都大学人文科学研究所所蔵日本関係欧文図書総覧—1950年以前刊行分—』（1986）がある。前者は雑誌を含む現代までの刊行物8000点あまりの分類目録である。後者は1430点を刊行年順に記載した正確至便な目録であり、とくに発行元の詳細な記載と索引は、日本関係洋書の出版文化史を研究する上で貴重な資料となっている。また、日本関係英文図書目録としては、国際基督教大学図書館と国際文化会館図書室の共同作業による両機関蔵書の分類目録『ブックス・オン・ジャパン』（1984）、国立国会図書館と国際交流基金本部図書館の蔵書を中心とした分類目録『英文日本関係図書目録1945-1981』（1986）がある。いずれもコンピューターによって編集され、戦後刊行の英文図書については利用価値の高いツールとなっている。

しかし、戦前すでに、日本関係洋書目録と書名に掲げるまでもなく、すぐれた蔵書内容と年月をかけた精緻な書誌的研究の成果として、『天理図書館稀書目録 洋書之部』（天理、1941, 1951, 1957, 1989）、『天理図書館所蔵キリシタン関係特別図書目録』（天理、1932, 1955）の刊行が始まっていた。これらは、ラウレス『切支丹文庫』（東京、1957）とならんで、とりわけ開国以前刊行図書の書誌調査に必ず参照すべき目録である。必ずしも日本関係洋書を多く含まないが、『内田嘉吉文庫稀観書集覧』（東京、1937）は元台湾総督内田嘉吉の西洋古版旅行記コレクションから465点を選び、周到な書誌と解題を付したもので、書誌学者弥吉光長がわずか2年半で仕上げた労作であった。

さて、1987年5月の創設以来、国際日本文化研究センターでは「外国語で書かれた日本関係書」の収集につとめてきた。「日本関係書」とは日本および日本人を直接的に主題とするもののみならず、多少を問わずページを割いて日本に関心を示している図書も含んだ名称である。収集の担当者また収集に協力した関係者の間では「外国語で書かれた日本関係書」を略して「外書」と呼びならわしてきた。「外書」を形成する上で質量ともに中核となったのは、元バーミンガム博物・美術館長ジョン・ロー氏が収集された、日本関係英文図書の一大コレクション（3300点余）であった。しかし、関係者の努力で、1冊また1冊と、さまざまな出会いの思い出を宿しながら集められた貴重な書物も数多い。ジョン・ロー・コレクションとならび称せられたポール・ブルーム・コレクションは横浜開港資料館に収蔵され、英文、仏文、独文、オランダ語、ポルトガル語、スペイン語、イタリア語、ラテン語など言語別の目録が刊行されている。

国際日本文化研究センターの創立10周年事業の一環として企画された本目録は上記「外書」のうち、1900年以前刊行の欧文図書に限ったものであるとはいえ、10年間にわたる資料収集の成果の一端を示しているといつてよい。収集資料の全体についてはすでに、センター所蔵図書データベースをもとに、1993年12月現在の『外国語図書目録』（1994）および『日本語図書目録』（1994）が刊行されており、「外書」の検索はデータベースまたはこれらの冊子体目録から検索できる。

1994年3月23日、本目録編集の基本構想がはじめて検討された。創立10周年記念事業として3年以内に完成しなければならないという時間的制約のなかで、いかにして、欧米書誌学の成果である既存の日本関係洋書書誌の水準に接近するか、また、国内の他の有数のコレクションについて刊行された

優れた目録類に比して遜色のない、しかも新しい特色を備えた信頼できる目録を実現するか。これが編集上の最大の難関であった。

本目録の特色は1996年3月現在の収蔵「外書」のうち1900年以前刊行分1057点について、その「目次」または「日本関係記事」を採録し、標題紙、口絵、図版、挿絵などの映像写真2721点を掲載したことである。記載すべき図書が全体として日本を扱っている場合は目次全体を採録し、部分的に日本に関する記述が見られる図書の場合は、目次または本文によって関係箇所を調査し、記載ページを示した。西洋世界は文字の伝える概念によって「日本」をどのように理解または誤解したか、これを知る鍵を提供できたと思う。一方、標題紙は書物の顔である。1点ごとにその顔立ち、容貌の写真を掲載し、標題の表記ではとらえきれない近代ヨーロッパの出版文化のありようを伝えることにした。また、読書人であると否とを問わず、キリシタンの時代から3世紀の間、ヨーロッパの人々は口絵、図版、挿絵などの映像情報によって、どのような日本像を形成したか。その歴史を検証する手がかりをも提供できたと思う。上に一瞥した日本関係洋書誌の永い歴史に照らしても、こうした特色を有する本目録は存在意義があると信ずる。本書が内外の日本研究者のみならず多方面の専門分野の方々、また一般の書物愛好家によって、文献目録としての利用にどどまらず、異文化交流の基本資料集としても活用されることを願う次第である。

本目録の刊行は1996年はじめに発足した「10周年記念事業委員会」で正式に認められた。また出版実現の実務面では、管理部長川本幸彦氏以下、管理部諸氏の理解ある協力を受けた。関係諸氏のご尽力に厚く感謝する。編集作業は下記のメンバーからなる編集委員会を毎週1回開催して、その進捗を調整し、執筆者、執筆協力者、関係各位のご奮闘によって、刊行にこぎつけることができた。ここに深甚の謝意を表するものである。

平成10年3月31日

松田 清
白幡洋三郎

付記 本目録3冊に続き、著者名・書名・出版者名・関係人名などの総合索引を編む予定である。また、本目録の内容は別に国際日本文化研究センターのデータベースとして公開の予定である。

『国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録—1900年以前刊行分—』編集委員会

- 白幡洋三郎（国際日本文化研究センター教授）
- 園田 英弘（国際日本文化研究センター教授）
- 松田 清（京都大学教授・国際日本文化研究センター客員教授）
- 伴 美子（国際日本文化研究センター資料課長）
- 西川 慈子（国際日本文化研究センター資料課専門官）
- 田中 耕二（国際日本文化研究センター資料課目録情報係長）